

『観光と「性」：迎合と抵抗の沖縄戦後史』

小川実紗*著、創元社、2023年

伊藤 将人†

I. はじめに

本書は、沖縄戦後史を観光の視点から問い直した著作である。本書は、著者が2022年3月に立命館大学大学院社会学研究科に提出した博士論文に、大幅な加筆修正を行ったものである。

II. 本書の問い・方法論・構成

本書の問いは極めて明瞭である。本書は、①戦後沖縄では、なぜ、いかにして観光が主力産業として選ばれるようになったのか、②沖縄は、観光をめぐる議論を通してどのような自己像を描き、それをいかにして実現しようとしたのか、③そこには、沖縄・日本・アメリカの関係性がどのように反映されていたのか、という3つの問いを中心に構成されている。

その特徴は、観光政策史や観光における沖縄像の表象の分析ではなく、観光をめぐる言説そのもの（観光言説）の変容プロセスを跡付けることで、副題にも掲げられた「迎合」と「抵抗」の沖縄戦後史を描き出した点にある。

観光言説を読み解く具体的な分析の段階では、さらに具体的な3つの着眼点として、①基地やアメリカが観光言説でどのように意識されていたのか、②日本本土との関係がいかに反映されていたのか、③沖縄観光とセクシュアリティに関わる問題がいかに語られたのか、を提示している。本書はこれらの着眼点から戦後沖縄をめぐる観光言説を通時的に分析することで、各時期における観光言説と複雑な背景要因（戦後政治・社会背景など）の関連性を検討し、沖縄戦後史を観光の視点から問い直している。

観光言説の分析にあたっては、ジョン・アーリ（Urry, 1990）の「観光のまなざし（tourist gaze）」概念を援用しながら、歴史社会学の視点に立ったメディア分析・言説分析を採用している。また、分析対象はメディア言説やメディア・イベントであり、中でも沖縄の総合雑誌や論壇誌の分析に重点を置いている。この点について、観光イメージや観光の空間は社会的エリートによって一方的に形成されるものではなく、観光客や地域住民、メディア、行政、観光事業者といった様々なアクターの相互作用を通して形成され、観光のまなざしが組織化・構造化されるとき、メディアが重要な役割を果たすとしている。

* 立命館大学産業社会学部授業担当講師

† 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター研究員／講師
ito@glocom.ac.jp

本書の序章と終章を除く構成は次のとおりである。第1章「戦後の混乱と観光言説の出発——終戦～1950年代におけるアメリカの豊かさ」では、終戦から1950年代を対象に、沖縄現代史、沖縄観光イメージに関する先行研究を参考に沖縄の戦後復興を整理した上で、娯楽施設や歓楽街など沖縄の余暇や観光の素地が形成される過程における米軍の影響を明らかにした。第2章「復帰をめぐる議論と観光言説の関係性——1960年代～本土復帰前後における「平和産業」への意識」では、1960年代から1972年の沖縄返還前後を対象に、復帰運動と本土からの沖縄観光の盛り上がり、観光開発をめぐる米軍基地との関係及び本土復帰への期待と反感と観光開発の関連性を明らかにした。第3章「海洋博批判とセクシュアリティ観光の接合——1970年代における本土－沖縄のヒエラルヒーの再生」では、1970年代を対象に、復帰後の沖縄におけるセクシュアリティ観光言説を対象に、本土と沖縄、アメリカの相互関係、ジェンダー／セクシュアリティ問題の焦点化過程と観光をめぐる議論への影響、海洋博を契機とする観光開発をめぐる沖縄と本土の相互関係および齟齬を明らかにした。第4章「「基地」の観光地化と「レトロアメリカン・イメージ」の発見——バブル期以降の転換」では、1980年代以降から現在を対象に、「基地」の観光地化と「アメリカ」イメージの消費・表出過程を、特に港川外人住宅における「レトロアメリカン」イメージの発見と構築をめぐる分析から明らかにした。

Ⅲ. 本書の特徴と成果

本書の卓越した成果として、第一に膨大な沖縄観光言説と複雑な背景要因の網の目を、ときにダイナミックに、ときに繊細に解きほぐすことで、観光の視点から鮮やかに沖縄戦後史を明らかにした点にある。

本書が対象とした各時期の背景要因は、主に3側面に分類可能である。

一つ目の側面は、沖縄－日本－アメリカの相互関係の側面である。戦後沖縄は米軍統治下にアメリカとの関係性が強まると同時に、日本からは物理的、政治的、文化的に切り離された。こうした三者の相互関係は、本土復帰前後の時期に転換点を迎えたが、本書が明らかにした通り、現在進行系でレトロアメリカン・イメージや外人住宅の観光地化などアメリカの影響は大きい。また、本土復帰以降の現在も、首里城再建と消失や琉球の再発見に象徴されるように、本土との相対的かつ非固定的な関係性の中で沖縄のアイデンティティは断続的に構築されている。

二つ目の側面は、経済的背景、産業的背景、政治的背景、文化的背景など社会構造と呼べる側面である。著者が冒頭で言及している通り、戦後沖縄の観光は、沖縄経済の自立、基地依存経済からの脱却のための観光経済・観光産業の模索という形で発展してきた。また、本土復帰、海洋博に象徴的のように、戦後沖縄観光史は、常に政治的で、政策的な要因の影響を大きく受けてきた。

三つ目の側面は、本土復帰や基地問題、セクシュアリティ、戦跡、海洋博など各時代の沖縄における社会問題という側面である。Best (2008) などに代表される社会問題の構築主義的アプローチの観点から捉えれば、社会問題は関わるアクターの運動やそれを伝えるマスメディアの言説や表象によって構築される。本書で取り上げられる各時代の社会問題は、社会問題として捉えられたことに意味があり、観光はときに社会問題の解決策として期待され、ときに社会問題を戦略的に内面化することで発展と規模の拡大を加速させ、ときに沖縄観光に負のイメージを与えるネガティブ要因として作用したのである。

こうした本書が対象とした各時期における背景要因は極めて複雑であるが、その付置関係を明ら

かにする作業は、つづいて言及する独自の問題設定に基づく分析対象の選択と厚い記述に支えられている。

第二に、本書は厚い記述を支える言説として、先行研究では実証的な検討がなされてこなかった沖縄の総合誌・論壇誌と行政文書における観光言説に着目した点に新規性と独自性がある。

具体的には、戦後沖縄の空間編成に関する史実および沖縄観光史については、『沖縄県史』『那覇市史』『浦添市史』『コザ市史』、沖縄観光協会の機関誌『観光沖縄』、沖縄タイムス社編『沖縄年鑑』などを対象としている。沖縄県内で発刊された論壇誌や総合誌については、沖縄ローカル紙である『琉球新報』『沖縄タイムス』、雑誌『月刊沖縄』『沖縄思潮』『新沖縄文学』『青い海』『沖縄公論』『沖縄経験』などを分析対象としている。さらに、沖縄県内の媒体を中心としながらも、それ以外の全国紙および本土の総合雑誌、旅行雑誌の沖縄特集号、観光ガイドブックなども適宜、補助的に用いている。

本書のように、ある限定されたタイムスパンをとって特定の言説の構築過程を分析する際には、重層的な資料の読み込みが不可欠な作業となる（佐藤, 2013）。赤川（2006）がフーコーの言葉「全てを読み、全てを研究しなければならない」を引用しながら指摘したように、言説分析はあとう限り全ての資料を収集し当たることが望ましいとされる。一方で現実的には、重層的な資料の選択に際し分析上の恣意性を回避するためには何らかの基準で資料の幅を限定し、その中から言説の変化を捉えるという方針を選択せざるをえない（佐藤, 2013）。そこで本書は、先行研究の成果を踏まえつつ批判的に継承することで、沖縄で記された言説に焦点を当てるという分析戦略を採用し、結果的にその戦略は成功している。

第三に、前述のような、対象となる資料の選択戦略と観光言説の背景要因の分析によって、特に独自性のある成果を残していると考えられるのが、表題にも掲げられた観光と性／セクシュアリティの関連性である。特に、第1章で扱われた『月刊沖縄』1963年12月号掲載のコザの夜の座談会や、『青い海』1982年5月号の、歓楽街でホステスをつとめる女性へのインタビュー記事に基づく言説などは、沖縄観光におけるセクシュアリティが、買う側や売る側、それを取材する側といった、注目されにくい不平等性や権力関係、政治性に基づく複雑なアクター間の相互作用と社会構造に関連していることを実証的に明らかにしている。こうした言説は資料として、一読み物としても魅力的であると同時に、各時代の沖縄観光とセクシュアリティをめぐる言説が多様なアクターによって戦略的に可視化／不可視化、強調／非強調されることで、「沖縄が生き残るための沖縄像」を提供し続け、沖縄アイデンティティの構築に影響してきた歴史を明瞭に描き出すことを達成している。

IV. 本書の課題と発展可能性

本書は、以上のような特徴と成果を有する一方で、いくつかの課題と発展可能性を有する。

第一の課題として、メディア言説・言説分析の方法論的妥当性の曖昧さが挙げられる。本書では、「観光のまなざし」概念を援用し、新聞雑誌や行政文書に着目した歴史社会的な言説分析を展開している。言説分析をめぐるのは、1990年代以降多様な議論が蓄積されているため詳細は省くが、ここでは言説分析において重要な「言説外関係」の取り扱いから本書の課題を検討したい。

言説分析には大きく、言説内関係を重視する「言説至上主義」の立場と、言説内に閉じず言説外関係も重視する「弱い言説至上主義」の立場がある（牧野, 2019）。本書は、背景要因に着目して観光言説の変遷を明らかにする点で、「弱い言説至上主義」に立脚する研究であると考えられるが、本

書では、なぜ、言説分析を採用するのか、いかなる意味で言説分析という語句を用い、背景要因との関連性をどう考えるのか、どのような点に留意して分析を進めるのかといった点が明示されていない。

第二の課題として、メディア言説や行政文書を対象とする際の、言説アクターの位置付けや、沖縄独自の言説アクターに対する時代的制約、政治的規制をめぐる記述の薄さが挙げられる。戦後の冷戦体制においてアメリカの東アジア情勢をめぐる重要な拠点だった沖縄では、占領軍の政策に反せぬ限りで言論・集会・陳述・信教及び出版の自由が保証された（大城, 2013）。このことは、占領上都合の悪い言論や行為が弾圧されたこと、言論及び出版の自由は条件の範囲内でのみ許されたことを意味する。

こうした史実を踏まえると、本書が対象とする言説は、時代と政治的状况によって言説アクターに対する制約の程度が異なることが示唆される。分析時には、こうした言説アクターが置かれた、出版をめぐる制約や規制について説明し、十分に留意する必要があると考えられるが、本書では、各新聞雑誌記事が置かれた出版をめぐる時代的背景や、各メディアの政治的立場などはあまり触れられていない。沖縄研究であるからこそ、言説アクターの立場性や政治性は丁寧かつ詳細に描かれる必要があるだろう。

第三に、第二の点も踏まえての沖縄の「主体性」という表現をめぐる課題である。本書は、一貫して戦後沖縄における「主体性」の構築過程を観光言説の分析によって明らかにし、その独自性は、沖縄の資料を主な対象に、沖縄の人びとが抱いてきた観光イメージを実証的に分析した点にある。

しかし、先行研究とは異なる新規的かつ独創的な試みは、同時に沖縄の「主体性」という、分析と実証が難しい問いに挑むことを要求したと想像される。換言すれば、観光言説を通して特定のメディアやメディアに登場する言説アクター、特定の県や市町村行政がある選択を主体的に行い、戦略的に他者からのまなざしを内面化する過程を明らかにすることはできても、果たして「沖縄」という主体を想定し、観光言説の分析を通して「沖縄の主体性」を描き出すことは可能であるのか、という問いが浮上するのである。つまり、「沖縄」という主体や、沖縄の「主体性」とは本質的に何を指すのかという問いである。

例えば「観光客を獲得し、地域経済を成り立たせるための沖縄像を地域や行政が戦略的に選び取っていく状況」や「本土やアメリカと折り合いをつけながら、沖縄の生存戦略を模索していく戦後沖縄像」を明らかにすることは、言表の様々な連関を記述する言説分析で可能である。しかし、分布の規則性から「沖縄の主体性」と言えるほどの総体的な意思や戦略性を導き出すことができるのかは、検討が必要な点ではないだろうか。これは、本研究に限らず、観光を始めとする多様な地域活性化による開発発展をめぐる地域の「主体性」を言説に基づいて議論する際にも、考慮されるべき重要な点だろう。

ここまで、本書の課題や発展可能性について言及したが、これらの点は本書の歴史社会学的意義や戦後沖縄研究としての価値を損なうものではない。

今日、2000年代以降の史料空間の特徴は、歴史社会学と名の付く論文が、図書館やデータベースで入手可能な資料だけでも、それなりに記述できてしまえる点にある（加島, 2018: 437）。こうした中では、「堅実」な歴史社会学に対して「安易」な歴史社会学が量産されかねない（伊藤, 2023）。しかし、本書は、佐藤（2022）が歴史社会学の条件として提示する「「現在」性をもつ自分の問題意識と、「過去」性をもつ対象事象との間の「掛け算」」を重視し、「なぜその対象の分析において、「歴

史」が呼び出されるのか、その意味付けが深く問われ、かつ解くべき問題の設定と、その設定の枠組みの自覚化」（佐藤, 2022）に成功した、「堅実」な歴史社会学的研究であることは間違いない。『観光と性』は、今後の沖縄史研究、沖縄観光研究において重要な位置を占める 1 冊となっていくだろう。

参考文献

赤川学（2006）『構築主義を再構築する』勁草書房。

伊藤将人（2023）「地域社会学における「堅実」な歴史研究が問いかけること：歴史社会学をめぐる今日の状況への示唆」『地域社会学会ジャーナル』11 号, 21-26 頁。

大城由希江（2013）「琉球列島米国民政府メディア調査資料の紹介」『沖縄県公文書館研究紀要』15 号, 19-32 頁。

加島卓（2018）『〈広告制作者〉の歴史社会学：近代日本における個人と組織をめぐる揺らぎ』せりか書房。

佐藤健二（2022）「序に代えて：歴史社会学・再考」赤川学・祐成保志編『社会の解読力〈歴史編〉：現在せざるものへの経路』新曜社。

佐藤雅浩（2013）『精神疾患言説の歴史社会学：「心の病」はなぜ流行するのか』新曜社。

牧野智和（2019）「「言葉」を分析することの意義とその留意点」『日本労働研究雑誌』705 号, 75-80 頁。

Best, J. 2008. *Social Problems*, New York: W. W. Norton&Co. (= 赤川学監訳（2020）『社会問題とは何か：なぜ、どのように生じ、なくなるのか』筑摩書房）

Urry, J. 1990. *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. London: Sage Publication.
(= 加太宏邦訳（1995）『観光のまなざし：現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局)